

どんなことがあっても —アンネの日記 15歳の願い—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

作家をめざしていた15歳の多感な少女はいつ亡くなったのか。推測では3月上旬だ。非業の死を余儀なくされたアンネ・フランク(1929—1945)はナチス・ドイツの迫害を逃れて家族や知人たちと共に秘密の隠れ家に潜んでいた。

快活で聡明で人気者だったアンネは絶望的な状況のなかでも希望だけは決して失わなかった。キティと名づけた日記帳が最高の友人で2年間にわたる沈黙の対話を書き残す。

いつか自由な日が訪れたら日記を出版したいという夢を抱いていた。夢を現実のものにするために架空の読者を想定した改訂版も用意した。だが秘かに忍び寄る魔の手は目前に迫っていた。1944年8月1日の火曜日を最後に『アンネの日記』は永遠に中断する。

ユダヤ人狩りで隠れ家へ

アンネはフランクフルト・アム・マインの裕福なユダヤ系ドイツ人銀行家オットー・フランクと妻のエーディットの次女として生まれた。1933年、反ユダヤ主義を掲げるアドルフ・ヒトラーが政権を掌握すると一家は母国ドイツを離れてオランダのアムステルダムに亡命する。この年だけで6万3千人を超えるユダヤ系ドイツ人が国外へ逃れた。

オットーはスイスに移住した義弟のジャム製造関連会社のオランダ支社を任せられた。亡命と同時に無国籍者となったアンネは生徒の自主性を

尊重する自由な校風のモンテッソーリ・スクールに入学し、たちまち人気者になる。

第2次世界大戦が1939年に勃発し、領土拡大を目論むドイツ軍によってオランダが占領されるとユダヤ人狩りが始まった。1941年以降、ユダヤ人は公園、映画館、競馬場、プール、ホテルなどへの立ち入りを禁止される。

13回目の誕生日を迎えた1942年6月12日、アンネは父から赤と白のチェック模様のサイン帳をプレゼントされた。アンネはこれを日記帳として使うことに決め、キティと命名した。「あなたになら、これまで誰にも打ち明けられなかったことを何もかもお話しできそうです。どうか私のために大きな心の支えと慰めになってくださいね」と親友に語りかけるように書き始める。

ユダヤ人狩りが激化し、一家は7月に父の会社があるプリンセンフラハト通り263番地の隠れ家に移り住む。事務所の3階の本棚の裏に隠された秘密の扉を開けると居住スペースになっていた。アンネは隠れ家のことをうしろの家と呼んでいる。アンネの家族のほかファン・ペルス一家と歯科医のフリッツ・プフェファーが同居し、計8人が一緒に暮らした。



アンネ・フランク

窓を開けられず外出もできない牢獄のように窮屈な部屋で社員のミーブ・ヒースたちが図書館から借りてくる書物と秘かに聴くイギリスBBC放送が知識や情報を吸収する唯一の手段となった。

強制収容所での最後の別れ

読書好きのアンネは父に勧められてゲーテやシラーなどのドイツ古典文学に親しむ。マリー・アントワネット、ルーベンス、レンブラントらの伝記にも惹かれた。アンネはオランダ語で日記を綴る傍ら『じゃがいも騒動』『悪者』『カーチェ』『管理人の一家』『エファの見た夢』などの短編小説を書き、いつか作家になることを夢見た。

日記では最悪の状況でありながら「私の想像の翼は閉じ込められても閉じ込められても羽ばたきつづけるの」「私は理想を捨てません。どんなことがあっても人はほんとうに素晴らしい心を持っているといまも信じているからです」「あなたのまわりにまだ残されているすべての美しいもののことを考え、楽しい気持ちでいきましょう」と書き記し、人間性に対する希望・理想・信念を謳歌している。とはいえアンネは決して完全無欠の聖女ではなかった。「母親が子供たちにいっさいを話してやらない限り、子供たちは少しずついろんな知識を聞きかじる。それはまちがった知識に違いないのです」「大人のほうがいまの私たちよりずっとつらい目にあっているというのは、ほんとうですか。私はそうは思いません」と母や姉や同居している人々に不満を抱いていた。とりわけ母との熾烈な葛藤に苛立ったときは屋根裏部屋の採光窓から裏庭のマロニエの樹を眺めて気を紛らわせた。

隠れ家での2年間に及ぶ共同生活は1944年8月4日をもって突然終了する。午前10時30分頃、匿名の密告を受けて出勤したナチス親衛隊(SS)のジルバーバウアー曹長と数名のオランダ人警官によって8人全員が逮捕された。簡単な取り調べ後、8人はドイツの強制収容所に移送される。

移動中、アンネは列車の窓からずっと田園風景を見つめていた。ビルケナウ強制収容所に到着後、ユダヤ系ドイツ人1069人のうち549人が労働不能と判定され、ガス室に送り込まれた。その後、男たちは3km離れたアウシュヴィッツ強制収容

所へ歩かされ、アンネたちは父オットーと二度と会うことはなかった。残された女たちは坊主頭に入れ、左腕に囚人番号の入れ墨を刻印される。

まっすぐに視線を向けて

女たちの選別はまだ終わらなかった。アンネとマルゴーは母と引き離されてベルゲン・ベルゼン強制収容所に移送される。ひとり取り残された母エーディトはまもなく死亡した。

ベルゲン・ベルゼン強制収容所は恐ろしく不潔で食べ物もろくに与えられず、病死者と餓死者が続出していた。姉妹は共にチフスに感染し、先にマルゴー、そしてアンネもすぐに息を引きとった。

隠れ家ではオットーの会社の社員で一家を支えていたミーブが床に散乱したアンネの日記を発見する。彼女は戦後まで大切に保存した。

アウシュヴィッツ強制収容所に囚われていたオットーはドイツに進撃したソビエト赤軍によって1945年1月下旬に解放された。捕まった8人のうち、ただひとり生き残ったオットーはミーブから日記を手渡され、戦争と差別のない世界を願っていたアンネの想いを伝えようと出版の準備を開始する。アンネ自身も出版に備えてオリジナル原稿とは別に改定稿を残していた。編集に際して母、姉、同居者に対する辛辣な批判などは削除・修正された。初版は1947年、オランダの出版社から発売された。アンネの日記はしだいに反響を呼び、60以上の言語に翻訳され、2500万部を超える世界的なベストセラーになった。オットーは1980年に死去し、遺言によってアンネの著作物はすべてオランダ政府に寄贈された。

ビルケナウ強制収容所に護送中、アンネと親しくなり、生き延びることができたド・ヴィンケル家のローザは選別会場におけるアンネの姿を克明に記憶していた。「痩せこけて裸で丸坊主でしたが、それでも堂々として選別デスクに向かいました。アンネはマルゴーを励まし、背筋をしっかりと伸ばしてライトの中を進みました。ふとアンネの眼がこちらに向けられました。曇りのない眼で、まっすぐに視線を向けて、まっすぐに立って」と証言している。「私は死んだあとでも生きつづけたい」と語ったアンネは最後まで誇り高く生きた。